

第3回フォトフォーラム

「自然、生命、そして写真」

平成21年10月3日（土）有楽町朝日ホール

主催：社団法人日本写真家協会、朝日新聞出版（アサヒカメラ） 後援：文化庁

近年銀塩写真に加え、デジタル写真の急速で広範な普及により、いま写真が世の中に溢れています。その多くは消え去りますが、選ばれた写真が自然や人間、社会の記録、表現として確実に残ります。一般的にみれば、一枚の写真の価値が軽くなっているように感じますが、反面、日常の平穩な光景や厳しい現実、豊かな自然の姿を優れた感性と深い眼差しで捉えた写真の魅力と輝きは失われず、一枚の写真の重みは増していきます。そこで、改めて写真というメディアの持つ意味、可能性、影響力などについて「自然・生命」に視点を定め、パネリストの皆さんに語っていただきました。



10月3日11時より、(社)日本写真家協会・朝日新聞出版（アサヒカメラ）共催、文化庁の後援による第3回フォトフォーラムが東京有楽町の朝日ホールで開催されました。

時折、小雨がぱらつく天候ながらも、40代～60代を中心とした幅広い年齢層の500名を超える入場者で会場はほぼ満席となりました。

今回のテーマは「自然、生命、そして写真」。自然・生命の視点で関野吉晴（探検家、医師）・今森光彦（写真家）・田沼武能（写真家）の3氏のパネラーによる基調講演と、奥田明久氏（『アサヒカメラ』編集長）を交えたディスカッションが開催されました。午後1時、各パネリストの基調講演から幕を開けました。

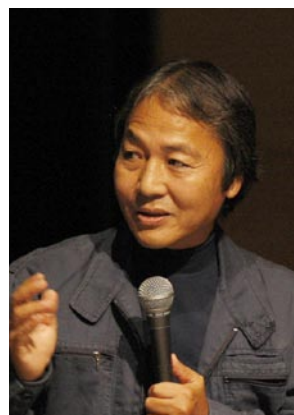
関野吉晴 *Sekino Yoshiharu*

アフリカで生まれた人類は地球上くまなく移動し、拡散しました。その中でアフリカから最も遠い南米最南端まで到達した人々の旅をグレートジャーニーと言います。20年に亘る南米通いの後、15年間をかけてグレートジャーニーの旅を続けました。

其処でも南米と同じように、自然と一体となって暮らしている人々との交流を重ね、写真を撮ってきました。

ダイナミックな景観に圧倒されながらシャッターを切ってきましたが、興味の中心はその景観の中に、その一部となって生きている人々でした。そこで暮らす人々の中に入り、共に暮らしてみると、自然を巧みに利用しながら、自然を破壊するのではなく自然の一部となり、それと一体となって生きている人々がいました。出会った人々に共通しているのは、私たちとは違う時間の流れを持っている、競争はしないという点です。自然を恵みとして感謝し、一方では自分たちではどうしても出出来ない

いものと畏れています。（インドネシアのクジラ漁の写真を投影しながら）この漁はもり一本でクジラに体ごとぶつかっていきます。自分もクジラに狙われる危険をはらんでいるわけです。もちろん必要以上の漁はしません。フェアなハンターと言えるでしょう。自然を変えていくのではなく、自然に合わせて生きている人々の生き方に、便利で快適な暮らしを求めて自然を壊してきた私たちが学ばなければならない、多くのヒントがあるように思います。



せきの よしはる

1949年1月20日東京都墨田区生まれ。1975年一橋大学法学部卒業。1982年横浜市立大学医学部卒業。一橋大学在学中に探検部を創設、アマゾン全域踏査隊長としてアマゾン川全域を下る。その後医師となり、25年間に32回、通算10年間以上にわたって南米への旅を重ねる。1993年からは、アフリカに誕生した人類がユーラシア大陸を渡ってアメリカ大陸に拡散した道を、南米最南端から逆ルートでたどる「グレートジャーニー」に挑み、2002年2月10日タンザニア・ラエトリにゴールした。2004年7月からは「新グレートジャーニー 日本人の来た道」をスタート、「北方ルート」「南方ルート」を踏破。2008年からは最終ステージの「海のルート」に取り組んでいる。1999年、植村直己冒険賞（兵庫県豊岡市主催）受賞。現在、武蔵野美術大学教授（文化人類学）。『グレートジャーニー全記録』（毎日新聞社）他、著書、写真集多数。

今森光彦 Imamori Mitsuhiro

子どもの頃から生き物が好きで、様々なものを採集したり観察したりしてきました。鳥や魚などは、ほ乳類に比べると、より自分に近い距離にいる生き物に感じられ親近感を覚え接していた。生き物には常に人の気配がつきまといっている。里山の概念はその意識から発展したものです。中でも昆虫には、たいへん魅せられた。これほど空間を有効に利用する生き物はいないのではないかと思います。私の仕事は、子どもの眼差しのような熱い好奇心で成り立っている。(フンコロガシの写真を投影させながら) これは、ケニアのスカラベと呼ばれる昆虫です。雌雄一対でゾウの糞を運びますが、運ぶのはオスだけでメスは決して手伝わす上から見おろしているだけ。私もオスの部類に入るので身につまされます(笑)。ラフレシアという世界最大の花は、ハエに受粉を依存しています。共生ですね。昆虫は、私にとって被写体である以

前に、常に敬意を払うべき生命としてある。昆虫が写っているの、昆虫写真には違いないのですが、わたしの写真に対する考え方は、あくまでも生命のふしぎさを表現する被写体として、昆虫というものがある。自然写真の世界では、今でも専門別にジャンル分けされるくらいがあるが、私の場合は、被写体にこだわることなくいつも広い視野で生命を見つめてゆきたいと思っています。



いまもり みつひこ

1954年、滋賀県生まれ。琵琶湖をのぞむ田園風景の中にアトリエを構え活動する。自然と人との関わりを「里山」という空間概念で追いつける。一方、学生の頃から世界各国の訪問を重ね、熱帯雨林から砂漠まで、生物と人が生きるあらゆる自然を見聞し取材している。写真集に『里山物語』、『昆虫4億年の旅』(新潮社)、『湖辺』(世界文化社)、『世界昆虫記』(福音館書店)、写真文集に『萌木の国』、『藍い宇宙』(ともに世界文化社)、『里山を歩こう』(岩波書店)、写真絵本に『ダンゴムシ』(アリス館)、『わたしの庭』(クレヨンハウス)など多くの著書がある。2008年東京都写真美術館、2009年静岡アートギャラリーで写真展「昆虫4億年の旅」を開催。で第20回木村伊兵衛写真賞、第48回毎日出版文化賞、日本写真協会年度賞(2005年)、第28回土門拳賞などを受賞。

田沼武能 Tanuma Takeyoshi

私が初めてアンデスに入ったのは49歳の時です。3,000mを超える高地に入るには、50代では体力的に難しくなると考えたからです。アンデス山脈は南米大陸を縦断する世界最長の山系で、全長は7,000Kmにも及び、山脈には6,000mを超える高峰が27も聳えたっています。この広大な山脈の狭間に、かつてインカ帝国として栄えた民族の末裔・インディオが営々と暮らしている。彼らの祖先の築きあげた文明は、紀元前1,000年頃にはチャビン文化をおこし、石造大建築の神殿を残している。その後14世紀に起ったインカ文明がある。インカとは「太陽神の子」という意味です。帝国はペルーのクスコを中心にアンデス一帯に繁栄をもたらす大帝國を建設し、高い文化を築きあげた。500年前にはすでに高度な技術のレース編みをしてきたことも残っています。しかし、1532年スペインのピサロの率いる僅かな兵士に滅ぼされてしまいました。

インディオは銃を持っていなかったからです。現在残っているインカ文明の歴史はスペインが入ってきて、口述筆記したものだと言われています。インカ時代のいけにえになった少年が万年雪の中から発見され、チリの博物館に保存されており、当時の風俗を知ることができます。

もし、この時代に写真が存在していたら、それこそインカの歴史をリアルに伝えたことでしょう。



たぬま たけよし

写真の生命は記録にある。写真を残すことで後世に時代社会を伝えたい。写真の力なくしては出来ないことだ。写真家。文化功労者。1929年東京生まれ。東京写真工業専門学校卒業。木村伊兵衛氏に師事。芸術新潮、タイムライフ嘱託などを経て1972年からフリーランスとなる。『世界の子どもたち』をライフワークとして、これまでに120カ国以上の人びとを撮影する。また、日本国内では武蔵野や文士・芸術家の肖像を撮影するなど、幅広い分野で活躍している。主な著書として、『すばらしい子供たち』(1975朝日新聞社)、『文士』(1979新潮社)、『東京の戦後』(1993筑摩書房)、『人間万歳』(2000クレオ)、『輝く瞳 世界の子ども』(2002岩波書店)、『60億の肖像』(2004日本カメラ社)、『難民キャンプの子どもたち』(2005岩波書店)、『武蔵野賛歌』(2006ネット武蔵野)『真像残像 ぼくの写真人生』(2008東京新聞出版局)など。(社)日本写真家協会会長、一般社団法人日本写真著作権協会会長、東京工芸大学芸術学部写真学科名誉教授。

第2部：3人のパネリストによる パネルディスカッション

パネリスト

関野吉晴 (探検家・医師)

今森光彦

田沼武能

司会：奥田明久 (アサヒカメラ編集長)

午後2時30分、待望のディスカッションが奥田氏の司会で始まった。

奥田 今回は「自然、生命、そして写真」という大テーマですが、お三方に共通しているのが南米というフィールドです。その辺りを関野さんから。



関野 20代過ぎからの20年間、南米に通っていました。そこで暮らす人々に興味を持ったからです。なかでもアンデス地域の人達は、我々日本人にそっくりです。アフリカで生まれたといわれる人類がシベリアを経て南米最南端までたどり着くグレートジャーニーを、逆に南米から辿ってみようと思ったのです。

田沼 アジア民族と同じルーツを持つと言われるアンデスの人々に興味を持ったのと、インカ帝国の滅亡の歴史は、日本の平家物語が連想されます。いわば滅ぼされた民族に対する歴史の美学に心を揺さぶられたのですが。

今森 私は、東南アジアから始まっています。南米は熱帯雨林が第一目標でした。当時、森林破壊が問題になっている時期で、「森林は燃えている」といった報道がかなり流されていました。ブラジルに入ったのですが報道とは違って実際は燃えているところは少ない。かなり誇張されているというのが実感でしたね。

奥田 自然の中の人間なのか、人間の中の自然なのかという点では。

田沼 自然があり人間がいるすべてを含めたものではないでしょうか。自然と人間を区別はできませんね・・・。

奥田 時間の流れ方の違いという点ではどうですか。

関野 エチオピアのある地域の人々は、現在の私達とは全く違う生き方をしている。自然の一部になっているだけでなく、それぞれが公平な立場で生きている。原始共産主義といった制度ではなく、物や土地に関しても所有権はないという考え方です。日本とは遠い地域で、違う時間軸をもった人たちがいるというだけでワクワクし



ます。共生という点では、私は生命全体が自分勝手な存在だと思います。それぞれの生きものの合意点が共生だと考えています。その点では、人間が一番バランスを崩しているし、それを知っているのも人間だと思います。

奥田 今森さんは里山を定義されていますが、共生という点ではどうでしょうか。



今森 生きものは絶妙なひとつの接点で繋がっている。共生は助け合う環境ではなく、自立した種の合意点という点では関野さんの考え方と同じです。里山に関しては全てに人間が関与している環境ですが、かつての日本の農業の形態は大変優れていてそれを残す事ができた。今後を考えれば所有権をもたない公平な形は多様性をつくる一つの方法ではあると思いますが、かなりデリケートな要素を含んでいますね。

奥田 さて写真の部分に移りますが、動画全盛のなかで、自然、生命を写真で撮るとい意味、力はどこにあるとお考えでしょうか。

田沼 写真の基本は記録だと考えています。デジタルの発展で写真のジャンルも多種多様になりました。しかし、写真の持つ記録性を大切にしていかないと社会との接点



ヤノマミ (ベネズエラ) の手づかみ漁

撮影：関野吉晴



オオアカエトリバナエグハと少年 撮影：今森光彦

は薄れると思います。時間を超えて、その時代を伝える事のできる大切なメディアです。

今森 僕は里山でハイビジョンも撮影しますが、ムービーを回すようになってさらに写真の良さに気づいた。写真には凝縮された一瞬の魅力があると思います。記録性ももちろんですが、見る側と意識を共有できるなにかが写真にはある。ムービーでは時間の流れを追っていただけなので、その感覚はあまりありません。

関野 30年以上前にムービーを一度だけ撮りましたが、ダラダラと撮っている感じがして非常にめんどろです。やはり、瞬間を凝縮する写真に魅力を感じます。時々、小学生や保育園児に話をする機会があってプリントを見せるのですが、スクリーンに映し出される動画の時とは違い、子ども達との距離をかなり近く感じます。

奥田 デジタル時代ですので技術面に移りますが、皆さん機材は何をお使いでしょうか。

田沼 デジタルとフィルムです(笑)。
ただ、デジタルに移行してから皆さんプリントをすることが少なくなった。カメラの液晶画面を見て写真を撮ったという満足感で終わってしまい、プリントをしなくなった。デジタルデータは単なる記号の集積です。プリントまでして初めて写真になるのです。皆さん、たくさんプリントしましょう(笑)。

奥田 今森さんはハイビジョンですか(笑)。
今森 いえいえ、デジタルカメラです(笑)。最初はデジタルが嫌いでした。なぜかというと、ハイビジョンは信号の配列だけなんです。デジタル画像の質の軽さを感じていました。今は画質もよくなり、最新の機材は動画を撮りながら、そのまま写真も撮れるようになっていますが、写真は写真として独立した存在でいて欲しいと思います。

関野 シャッターを押すときの気合いが違いますね。フィルムの頃はここぞ！という時は夢中で撮りましたが、デジタルではその気合いがやや薄れたように思います。



大地の神パチャママに酒をささげ豊作を祈るインカの末裔 撮影：田沼武能

それと、現像後の高揚感が違いますね。フィルムは日本に帰って、現像するまで半年はかかっていましたが、今は現場で見れてしまいます。いい面では、ISO感度の点ははずいぶん楽になりました。暗いところで撮影することが多かったですから、感度の違うフィルムを大量に持ち歩く必要も無くなりましたね。

奥田 最後ですが、自然や生命をテーマにして撮影していく姿勢として重要な点は。

田沼 撮る側が何を撮りたいのかが一番大切だと思います。誰かの真似をしても写真を撮ったときの感動が出ません。自分の惚れ込んだテーマを撮影して行って、撮った側の感動が見る側に伝わって、はじめてよい写真と言えるのだと思います。

今森 写真のジャンル分けにあまりこだわらないほうがいいと思います。一つの事にこだわり過ぎると、その間の関係性が見えなくなる事があると思うのです。幅広い眼で撮っていくことが大事だと考えます。

関野 私は写真を撮るために行くのではなく、行きたいところがあってそこ行く。初めてアマゾンに行く時に、朝日新聞の秋元啓一さんに「びっくりしたり、感動した時にポーっとしていないでシャッターを押せ！一歩前に出て撮れ」と、教わりました。その二つはいまでも覚えていています。

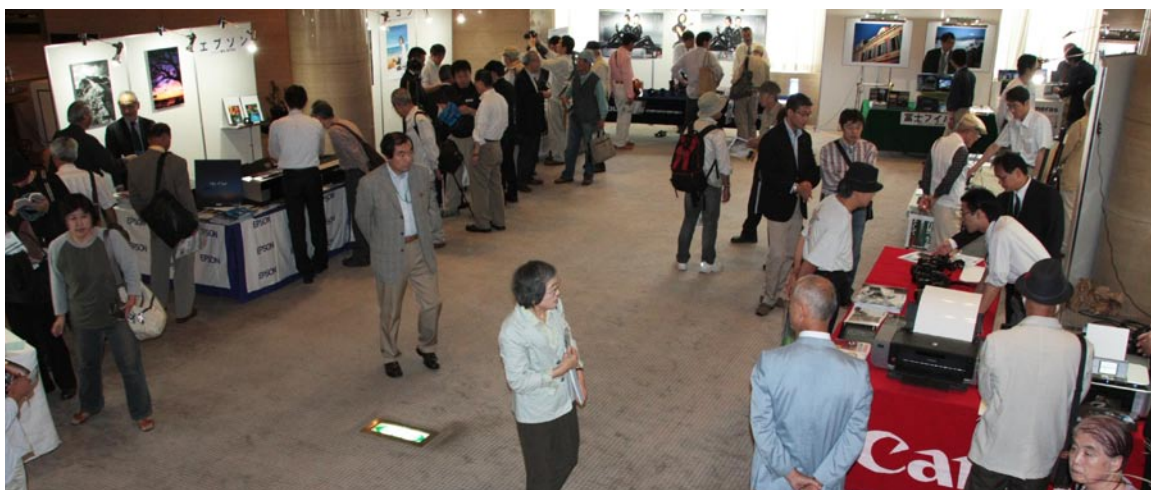
奥田 自然も社会も曇りのない眼で科学者のような冷静な眼と詩人の二つの心を持っている事が必要なのでしょう。広く深く、正直に写真を撮る事が全てのことに繋がるのではないだろうかとこのころに落ち着いたようです。ありがとうございました。



協賛 6 社による
最新機材・技術展

11:00 ~ 16:30 会場ロビーにて開催

協 賛：エプソン販売（株）／オリンパスイメージング（株）／キヤノンマーケティングジャパン（株）／（株）ニコンイメージングジャパン／富士フイルム（株）／（株）リコー



最後に、熊切副会長から「写真と動画、デジタル写真にまでおよぶ、内容の濃い話が展開された、来年もご期待ください」との主権者挨拶があり、定刻の午後4時、盛況のうちにフォーラムは終了しました。

回収されたアンケートの感想では、基調講演を長くしてほしい、パネルディスカッションが良かった、質疑応答の時間を設けてほしい、写真を撮る参考になった、これからも続けて欲しいといった意欲的な意見があり、次回フォーラムへの大きな期待が寄せられました。

ロビーでは、パネルディスカッションの前後に協賛6社（エプソン販売（株）・オリンパスイメージング（株）・キヤノンマーケティングジャパン（株）・（株）ニコンイメージングジャパン・富士フイルム（株）・（株）リコー

の最新機材、技術展があり、各メーカーのブースでは、新製品を手にした来場者が熱心に見入り、担当者のこまやかな説明を聞きつつ活発な質問が飛び交っていました。



日本写真家協会のブース

また、JPSのブースも設けられ、書籍『スナップ写真のルールとマナー』の販売や「写真保存センター設立」への募金活動が行われました。

（記／倉持正実、撮影／小城崇史、小池良幸）



エプソン販売（株）



オリンパスイメージング（株）



キヤノンマーケティングジャパン（株）



（株）ニコンイメージングジャパン



富士フイルム（株）



（株）リコー